

実践事例② 江東区立東陽小学校

1 取組・活動名

「4年 よりよく関わり合うために」

2 取組・活動のねらい

- 障害者と触れ合ったり、実際に体験したりすることで、障害についての理解を深める。
- オリンピック会場となる自分たちの町のバリアフリーについて知る。
- パラリンピアンとの交流を通し、パラリンピックについての理解を深める。
- 調べたり、体験したりしたことを新聞やパンフレットにまとめ発表し合う。

3 教育課程上の位置付け

「総合的な学習の時間・10時間」

障害者と盲導犬との交流(2時間)

義足体験・パラリンピアン交流(2時間)

江東区まちづくり課・ボランティアセンター訪問(2時間)

調べ・まとめ(4時間)

4 実施上の工夫

- ・ アイマスク体験や車椅子体験、義足体験など、実際に障害を体験する。
- ・ 障害者の方のお話を聞いたり、介助犬(盲導犬)と触れ合ったりすることで障害者の生き方や苦勞などを知る。
- ・ 江東区まちづくり課、江東区ボランティアセンターによる出前授業を実施し、オリンピックに向けての街づくりの様子やバリアフリーについての理解を深める。
- ・ パラリンピアンと交流し、パラリンピックについて理解を深める。

5 本取組・活動の内容



- ・ 江東区まちづくり課と江東区ボランティアセンターに協力いただき、障害者の方々と交流した。
- ・ 自分たちが暮らす街、江東区がオリンピック開催に向けて変わっていくこと、また、段差や階段、歩道等の凸凹を車椅子やアイマスクをつけて歩いて体験し、障害者にとってやさしい街になっているのかを知り、さらに、バリアフリーやユニバーサルデザインを進めていくことの大切さを学んだ。



- ・ 「盲導犬ベルナ」の作者と、盲導犬と交流し、盲導犬についてのお話しを伺った。
- ・ 視覚障害のある方の苦勞や普段の生活の様子について、障害者にどう接し、手助けをしてあげるといいのかを学んだ。また、お札をどうやって判断しているかなど、アイマスクをつけて体験した。



- ・ リオパラリンピック陸上4×100リレー銅メダリストと義足体験を実施した。
- ・ パラリンピアンから、自身が右足を失い義足になったこと、競技用義足と出会い陸上を始めパラリンピックを目指したこと、リオパラリンピックの様子等のお話しを聞いた後、義足体験を行い、少しの段差でも歩きにくいことや、義足によって健常者と同じ生活が容易であることを学んだ。

6 成果

- ・ 実際にアイマスクや義足を体験したことで、障害についての理解が深まり、障害者にとって日常生活での不自由さなどについて共感しやすくなった。
- ・ 障害者と触れ合うことで、どう介助すればよいのか、どんなことで協力できるのかを考えるきっかけとなった。また、差別意識や偏見をもたないようになった。
- ・ 区役所や公営機関に協力していただいたことで、自分たちが住む街についての関心が高まり、東京2020大会に向けて、バリアフリーやユニバーサルデザインをさらに進めていく必要があると感じる児童が増えた。
- ・ リオパラリンピック競技大会出場のメダリストとの交流を通して、障害についてのみの理解に留まらず、アスリートの生き方や障害に負けず夢を追いかける強い心について学び、今後の学校生活に生かそうと感じることができた。
- ・ オリンピック・パラリンピックの競技会場が自分たちの住む街にできることを実感でき、夢が広がった。